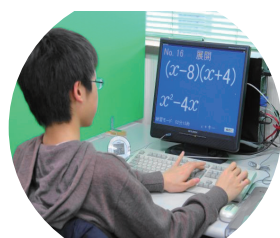




小学生も勉強している姿勢は中学生や高校生に負けてはいません。休憩時間はとらずに勉強します。



いつも小学生、中学生、高校生が混じって学習しているので話題も豊富で色々なことを学べます。



ノートには魂が入っているけど...

高校の社会は大変です

高校生は電子辞書を使う



真剣に勉強する高専の佐々木君と高3の住川さん

慶應の新田君が後輩の部活を見に

6期生の鉄平君がお父さんに

中学で一部の英語授業を日本語を使わずに行うことや、国際交流団体などと連携し、外国人と一緒に自然体験に取り組むことなども盛り込んだ。(本当に必要なのだろうか?)

「英語を小学校正式教科に！」教育再生会議、高学年、格上げ提言案-国際化に対応
政府の教育再生実行会議(座長・鎌田薫 早稲田大総長)の提言素案に、小学校高学年で英語を正式教科化することが盛り込まれることが15日、関係者への取材で分かった。国際化社会におけるグローバル化に対応するため、小学校での英語教育の質の向上が必要と判断した。同会議は次回会合で提言素案を詰め、月内にも安倍晋三首相に提言を提出する。

同会議はこれまで、いじめ対策と教育委員会改革を安倍首相に提言しており、今回が第3次提言となる。素案は、企業の国際競争が激しくなる中で、英語を使って、世界で活躍できるグローバル人材の養成を重視。英語教育の充実策として
(1) 小学5、6年で週1回の「外国語活動」として実施されている英語を正式な教科に格上げ
(2) 英語教育の学年引き下げ
(3) 専門教員による授業の促進
(4) 学習教材の充実

『6月は各学年最初の定期テストと漢字検定』
予定表のように、中学校、高校ともに今年度の最初の定期テストです。定期テストなのでテストの範囲が出ます。いつも言っているように日頃の学習が大切ですが、特にテストの範囲を集中的に学習することが結果に繋がります。特に、中三生は修学旅行も終わり、入試まで9ヶ月ほどになります。
定期テストは内申点に繋がるので、各学年しっかりとテスト勉強する必要があります。テスト範囲が出たら必ず持って来て下さい。また、22日と23日には1000分特講(希望者)を行います。
14日(金)には漢字検定を実施します。現在は小三から高三までの生徒が在籍していますので受験級も9級から2級まで。それぞれの受験級合格に向けて真剣に取り組んで下さい。

『早起きがリズムを整える』
「睡眠は、体の成長や脳の発達、心の安定に大きく関わっている。」久留米大学医学部の内村直尚教授は、睡眠の大切さを強調する。
「深い眠りによって成長ホルモンが出て、身長が伸びたり体力がついたりするほか、脳の認知機能が上がって学習により影響を与える、免疫が働くようになって病気に抵抗力がなくなるなど、様々な効用があります」新陳代謝を促す役割もあり「寝不足は肥満につながりやすい」とも話す。
ベネッセ世世代育成研究所の調査(2010年)によると、午後10時以降に寝る1歳半〜6歳(就学前)は約24%で、10年前の39%に比べ減っている。夜間の平均睡眠時間は約10時間だが、保育園児では9時間と少なくなっている。

内村教授は、就寝時間が遅い理由として、①父親の帰宅が遅い②保育園での昼寝の時間が長い③夕食の時間が遅くなっているを挙げる。「子どもは親の生活リズムに影響される。親が適切な睡眠時間を知って、近づける努力をして欲しい」。
睡眠は、浅い眠りの「レム睡眠」と深い眠りの「ノンレム睡眠」を繰り返す。もともと深いノンレム睡眠が現れるのは、午後10時から午前3時ごろまでの間だという。
では、どうすれば「早寝早起き」できるのか。子どもは起きてから14時間後、大人は16時間後くらいに、自然に眠くなるようになっていく。このため、休日の朝遅くまで寝ていると、その日の夜は早く寝ることができず、翌日以降の睡眠リズムが乱れてしまう。

重要なのは、なるべく決まった時刻に起きること。朝は必ず日光を浴びて一定の時刻に朝食をとる。できるだけ午前中のうちに、他の子どもと遊ぶことも大切だ。母子だけで過ごしていると、社会的なリズムができていく。保育園や幼稚園へも、睡眠の乱れは、病気にもつながる。内村教授は「子どもや高齢者は生体時計を調節する機能が弱く、睡眠のリズムがいったん崩れると元に戻りにくい」と指摘する。たとえば子どもの時差ぼけが、なかなか直らないのはそのためだという。
「乱れたリズムが固定してしまい、元に戻せないまま不登校につながるケースもあるので、注意して欲しい」と呼びかけている。
(朝日新聞 4月6日より)

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土		
休塾		●美原定期テスト		●富原・遠矢定期テスト		●景雲定期テスト	■1000分特講■	■1000分特講■		●鳥取西定期テスト				休塾		★漢字検定★		●江南定期テスト			休塾		鳥取(修)富原(修)		●附属中・高専定期テスト		鳥取(修)	●別保中定期テスト	景雲(修)美原(修)●湖陵定期テスト	●北陽・工業定期テスト	鳥取西(修)

携帯電話の持込は禁止。連絡は塾の電話を使用して下さい。

6月の予定

『見えない、聞こえない、生きるって何?』 荒さんの世界



クリスマス会に現れたサンタに驚く荒美有紀さん。ひげを触って確かめ、笑顔を見せた
24日午後、東京都板橋区、遠藤真梨撮影



目と耳が不自由な大学生の荒美有紀さんは、手のひらに直接文字を書く「手書き文字」で相手と意思疎通する
=10月22日、東京都港区、遠藤真梨撮影



親友の久住文乃(あやの)さんが肩に書くおしゃべりに「そうなんだ。相づちをうつ荒さん(中央) =東京都港区、遠藤真梨撮影

大学は指文字通訳者やパソコンでのノート記者を用意し、授業を保障した。通学・帰宅時の付き添いは大学のサークル「点字会」が引き受ける。点字を学ぶ10人ほどが最初は気遣いしつつ、やがて友達として、彼女とつながった。

何人かでおしゃべりする。一人が荒さんの手のひらや背中に指で字を書き、状況を伝える。置いてきぼりにしないよう、会話に間をつくる。「場のルールがいつの間にかできた」と嶋村大樹(ひろき)さん(21)は言う。

荒さんにとって、顔も声も知らぬ新しい人間関係。手に書かれる文字に、性格や気持ちは表れる。かわりを重ねるうち、その人の輪郭が次第に浮かんでくるのだという。

「なぜ私の周りには、こんなにも温かくて優しい人があふれているんだろう。目と耳が使えていた頃より幸せなのかも……」

11月初め、大学の学園祭があった。

車いすですべて来た荒さんのもと、入れ代わり友人们が寄ってきて、手に言葉を伝えてゆく。

ソーセージのにおい、車いすにおつかる人。にぎわいに囲まれ、その一部を感じとり、彼女は楽しんでいる、とばかり思っていた。ところが、本当は不安と緊張とで泣きたいほどだったと、後で知った。健常であることが当たり前の人。何もできない障害者にどう接すればよいかかわらず、戸惑う空気を感じる、という。この場に自分はいいんだろうか――。

「それでも、私は社会に出て行くことで、自分の人生を切り開こうと決めたのだから」

荒さんは、記事が載る前にやっておきたいことがある、と言い出した。

出身地の栃木県で過ごした中学・高校時代、仲良しの4人組がいた。よくけんかし、旅行した。その仲間に、自分の今の状態をまだ知らせていなかった。

闘病のことは伝わっている。だが「会いたい」とメールが来ても「お互い忙しいよね」とはぐらかしてきた。見えて、聞こえるふりを、してきた。

「こんな私を変わず受け入れてくれるだろうか。あの頃を思い出すと、胸がしめつけられる。今の自分を否定してしまいそうで。でも見えて、聞こえていた2年間の荒美有紀も、

私の大切な一部だから」

何日も考え抜いた文面のメールを、送信した。

【石橋英昭】

朝日新聞デジタル 2012年12月24日

5月18日(土)のTBSテレビの「報道特集」で、「盲ろう女子大生の挑戦」が放送されました。荒美有紀さんが(明治学院大4年)、病気により盲ろうになってからの1年間を取材取材したもので、病気により半年ほどの期間で光と音が消え、夜も眠れず、母の手を握って離さなかった彼女が、失いかけていた生きる意味を問い直し、彼女は尊敬する師と向き合います。「生きている意味があるのでしょうか。」と目に涙を浮かべながら話す彼女の言葉はとにかく重い。生きていくことは大変なことです。人生を悩んだり、命を無駄にしたり、惰性で過ごす人たちに彼女の生き方を知って欲しいと思います。番組を見逃した方、見たい方は録画したものがありませんので申し出て下さい。

『新型うつ病』という言葉の功罪について考える

「新型うつ病」という言葉が、テレビや新聞で取り上げられることが増えている。気分落ち込みや無気力な状態を示す反面、たのしいことがあれば気分が高揚し、一見するとわかまなようにも見え、若者に多く、他罰的で、自分が病気であることを周囲の者や医師にすずんで報告する。このような状態像を表現する通称として使われる。また、「現代型うつ」「逃避型うつ」「未熟型うつ」などの表現もされることがあり、一般の人には、いろいろなタイプの新しいうつ病が登場したかのような印象を与えている。しかし、これらの「〇〇うつ」と呼ばれる病気は、現行の標準的な診断基準におけるうつ病のサブタイプとしては存在しない。(中略)「現代型(新型)うつ」は、マスコミ用語であり、精神医学的に深く考察されたものではなく、治療のエビデンスもない」と見解を述べている。

つまり、「新型うつ病」に代表されるいくつかの新しい名称は、現代社会にうまく適応できず、不全感を訴え、刹那的な自己防衛的態度に終始するかのよう周囲から見えてしまう若者の状態を表現したものに過ぎない。それらの中には、もちろん何らかの精神疾患の診断基準に合致し、適切な治療が必要とされる者が含まれているが、一方で、周囲が、あるいは自分が「うつ病である」という認識を持つことで(そうではないのに)、本来ならば乗り越えていくべき成長のためのステップを先送りしてしまっているケースも存在するといえるだろう。

このような混沌とした状況は、正しいメンタルヘルスの普及という観点からは、決して望ましいことではない。なぜなら、この十数年間、行政、医療機関、そして企業は、年間3万人の自殺者を出している日本の現状を打開するべく、連携しながらうつ病をはじめとする精神疾患の早期発見、早期治療、そして社会復帰の支援に取り組んできた。しかし、「〇〇うつ病」という言葉の登場によって、「結局、うつ病は、怠けているだけ、つらいことから逃げているだけ」という印象が広まりつつあり、これまで力を注いできたメンタルヘルスの基盤づくりに水を差しかねない状況が生じている。第二として、メンタルヘルスの本質的な命題は、病気の発見や治療ではなく、**ストレス社会に負けない「人間力」や「折れない心」を育むことである。**(中略)

「新型うつ病」は、造語とはいえマスコミ用語として広く共感を得るのには、それなりの理由がある。そこには、**未熟で傷つきやすく、困難を乗り越えようとする力強さが貧弱であり、ゲームやインターネットコミュニケーションなどの即時的なフィードバックには熱中するものの、中長期的な我慢と努力の結果としてでなければ得られない成果には興味を示さない、といった若者への危機感が背景としてあるのかもしれない。**おそらくこのような「若者の危うさ」はいつの時代にも存在していたのかもしれないが、その危うさが故の失敗や困難を経験する中から「一人前」に成長していくプロセスが、個人の中にも社会の中にも、かつてはあったのであろう。しかし、「こども」が「おとな」へ成長していくプロセスを取り巻く、**家庭、教育、そして社会環境が変化していく過程で、「一人前」になることを先送りするのを許してしまう(あるいは、黙認する、放置する)時代になってしまったのかもしれない。**その詳細については、社会病理学者に委ねるとして、臨床心理学の専門家として強調したいのは、「こころのケア」の基盤をしっかりと整えることと、「現代社会を生き抜く人間力を育む」ことは相反しないということである。つまり、**現代的な若者を「おとな」へと導くプロセスは、「しっかりしろ」と突き放すことではないし、ましてや腫れ物に触るよう接することでもない。具体的な目標を示し、温かく導きながらも、しっかりと自分で責任を取ることの重要性を毅然として教えていくことだといえるだろう。**個人主義やITコミュニケーションが社会全体に浸透し、「踏み込まない人間関係」が是とされるが故に、人間力を育む厳しさと温かさを兼ね備えた豊かな人間関係が持ちにくくなり、結果として、心身の不調のサインを見逃してしまう。さらには、心身の不調が発覚した後も、社会復帰の支援基盤となる豊かな人間関係が脆弱であるために、本人も周囲も「どうしたらよいかわからない」という状態で迷走するというケースが少ないように思われる。このような若者と周囲の困惑が「新型うつ病」の正体なのかもしれない。(YOMIURI ONLINE 鈴木伸一/早稲田大学人間科学学術院教授)
こんな今だから、建前論や過保護ではなく本音で向き合うことが必要なのは!